

2026年1月18日 ガラテヤ1：11－24

説教題 「人間によるものではない」

【今日の説教から】

「わたしが宣べ伝えた福音は人間によるものではない。わたしは、それを人間から受けたのでも教えられたのでもなく、ただイエス・キリストの啓示によったのである」。前回の所にもこうありました。「人々からでもなく、人によってでもなく、イエス・キリストと彼を死人の中からよみがえらせた父なる神とによって立てられた使徒パウロ」。彼はどうしても何度も同じことを強調するのでしょうか。

彼は熱心に教えに奉じるにあたって二度と過ちを犯したくなかったのです。これが真実だと信じていった先に、それが全くの嘘であり過ちであったという絶望を二度と味わいたくなかったのです。

本当にそれは信じられるのか。間違いないのか。人生を、命を懸けて従っていけるのか。今度は大丈夫なのか。彼はそれを徹底的に確かめようとしてしました。人に取り入ることもせず、距離を置いて観察し、そこに神様の働きがあるのか、人の意図でも人の努力でもなく、人のつながりによってのみ維持されているのでもなく、そこには確かに神様のお働きがあるのかどうか…。彼は徹底的にそれを見つめ、隠遁の後にペテロに会いました。彼もまた「神のことを思わず人のことを思っている」と主から叱責され、また3度までも主を否む失敗をしながらも主の恵みのうちに「岩」と呼ばれる者でした。かつての迫害者が帰られたことを主に讃美する群れの美しい姿にも目が留まります。

皆様おはようございます。

また20日から寒波が入るとの天気予報です。外れてほしいとは思いますが、このところ寒波の予報は見事に的中していますから実に心配ですね。どうぞ風邪など召されませんようにご自愛ください。

さて、ガラテヤ書も1章の締めくくりとなりました。

1:1 人々からでもなく、人によってでもなく、イエス・キリストと彼を死人の中からよみがえらせた父なる神とによって立てられた使徒パウロ、

1:11 兄弟たちよ。あなたがたに、はっきり言うておく。わたしが宣べ伝えた福音は人間によるものではない。

1:12 わたしは、それを人間から受けたのでも教えられたのでもなく、ただイエス・キリストの啓示によったのである。

こんなにも何度も何度も同じことを念を押して冒頭から語るパウロの思いはどのようなものだったのでしょうか。

彼は熱心に教えに奉じるにあたって二度と過ちを犯したくなかったのです。これが真実だと信じていった先に、それが全くの嘘であり過ちであったという絶望を二度と味わいたくなかったのです。

本当にそれは信じられるのか。間違いないのか。人生を、命を懸けて従っていけるのか。今度は大丈夫なのか。彼はそれを徹底的に確かめようとしてしました。人に取り入ることもせず、距離を置いて観察し、そこに神様の働きがあるのか、人の意図でも人の努力でもなく、人のつながりによってのみ維持されているのでもなく、そこには確かに神様のお働きがあるのかどうか…。

パウロは10節でこう言っていました。

1:10 今わたしは、人に喜ばれようとしているのか、それとも、神に喜ばれようとしているのか。あるいは、人の歓心を買おうと努めているのか。もし、今もなお人の歓心を買おうとしているとすれば、わたしはキリストの僕ではあるまい。

神様は、パウロが迫害していたそのキリスト者の群れに彼が入っていくことを導かれ、パウロはどの面を下げてその群れに入って行ったらよいかがく然としたかもしれません。それまでは自分が敵視していたその群れの中に真実があった。それなのに彼はそれを嘘っばちだと決めつけて虐待し、滅ぼそうとしていた。しかし今はその群れと共に生きよと神様に命じられる。これはなんという数奇な運命なののでしょうか。全く違うところに行けというならば楽だったかもしれませんが、つい先日まで炎のような勢いで迫害していたその所に行くようになろうとは…。何とばつの悪いことなののでしょうか。

1:13 ユダヤ教を信じていたころのわたしの行動については、あなたがたはすでによく聞いている。すなわち、わたしは激しく神の教会を迫害し、また荒しまわっていた。

1:14 そして、同国人の中でわたしと同年輩の多くの者にまさってユダヤ教に精進し、先祖たちの言伝えに対して、だれよりもはるかに熱心であった。

1:15 ところが、母の胎内にある時からわたしを聖別し、み恵みをもってわたしをお召しになったかたが、

1:16 異邦人の間に宣べ伝えさせるために、御子をわたしの内に啓示して下さった時、わたしは直ちに、血肉に相談もせず、

1:17 また先輩の使徒たちに会うためにエルサレムにも上らず、アラビヤに出て行った。そ

れから再びダマスコに帰った。

1:18 その後三年たってから、わたしはケパをたずねてエルサレムに上り、彼のもとに十五日間、滞在した。

これは彼が合わせる顔がないから使徒たちを避けていたということではないと思います。彼はとことん熱心に、国の中のあらゆる同年代のものよりもはるかに熱心に精進し、成長し、度を深めていました。彼はかつての自分の姿を回顧しています。

1:13 ユダヤ教を信じていたころのわたしの行動については、あなたがたはすでによく聞いている。すなわち、わたしは激しく神の教会を迫害し、また荒しまわっていた。

度を超えて、全く完全に目盛りが振り切れたように彼は全精力を傾けて、疑いもなく、全体重をかけて異端であるキリストの教えとその信奉者たちを滅ぼそうとしていました。それがかつての彼の生き方でした。だれよりもはるかに熱心でした。彼はとことんやり抜くタイプでした。妥協なく自分が信じた道を突き進むタイプでした。

「同国人の中でわたしと同年代の多くの者にまさってユダヤ教に精進し、先祖たちの言伝えに対して、だれよりもはるかに熱心であった。」と、彼は同年代のいわばライバルたちと自分を比較することを言っています。そこにはかつての生活において彼が、年の近いライバルたちに負けたくないと思ってシャカリキに、一生懸命に人と差をつけるために頑張ったということと言わんとしているのではないのでしょうか。

また、10 せつに、「今わたしは、人に喜ばれようとしているのか、それとも、神に喜ばれようとしているのか。あるいは、人の歓心を買おうと努めているのか。もし、今もなお人の歓心を買おうとしているとすれば、わたしはキリストの僕ではあるまい。」と言っているように、かつての生き方の中で彼は、キリストを知る前に彼は、人に喜ばれ、人の歓心を買うことに熱心だったのではないのでしょうか。

能力もあり、高名な先生の弟子であり、人からの覚えもめでたい。その中には彼の、同年代の者たちを凌駕したいという熱烈な野心があったのではないのでしょうか。多くの策略が実ったということだったのではないのでしょうか。彼は人と人とを比較して、自分がその上に躍り出るということを野心的に願っていた、人の間で奮闘努力して結果を得るタイプだったのではないのでしょうか。

もしもそうであるのならば、彼は神様から方向転換を強いられた時、新たな場で活躍するという目標の下で、彼の悪しき迫害の前歴からしても、主だった人たちを懐柔する方策を取るべきだったのではないのでしょうか。彼は積極的な人でしたから、ずっと顔見せが出来なくて3年間も隠遁してうじうじとしているタイプではないような気がします。しかし彼はそれ

をしなかった。それはなぜでしょうか。

1:15 ところが、母の胎内にある時からわたしを聖別し、み恵みをもってわたしをお召しになったかたが、

1:16 異邦人の間に宣べ伝えさせるために、御子をわたしの内に啓示して下さった

彼は自分のいわば黒歴史の部分である、真実を見誤って大変なことをしでかしてしまったという出来事を、すべて神様のお導きの中にあることと信じるに至ったのです。こんな風上にも風下にも置けない、顔を表すことの出来ない自分。迷惑をかけた自分。自信をかけて信じていたものが、神様から外れて、全てではないにしても見事に人の作り上げた過ちの産物であったということ。そういうことをしでかす人間という存在の、本当に哀れなほどの弱々しさと真理を見誤る愚かさを突き付けられて、人から気に入られて、他の人よりも重用されて、名声を得て自分を誇りに思っていたすべての軽薄さに彼はいやというほど気付かされたのです。

かつての自分の生き方に完全に決別して、もう重鎮から目を留められて、人の期待に応え、重んじられ活躍するという生き方をかなぐり捨てて、人によって教えられるのでもなく、人を通して注目されることも捨てて、ただ神様からのみ導かれたいと願ったことでしょう。それが彼の3年間の隠遁の意味であったに違いないのです。彼はそのイエス様の語り掛けから始まったその神様による出会いと啓示を深めて、ゆるぎない確信となるまでそれを神様ご自身に手ずから育てていただきたいと願ったのです。もはや二度と人間のご都合主義に騙されたくない。どんなに自分が底でうまくやってのし上がれると知っていてもそういうやり方で人からは認められたくはない、ただ神様から手ずから頂いて、核心を悟りたい、真理から迷い出たくない、そういう彼の強い思いがあったのではないのでしょうか。

キリスト教的なものを追求するのではなくてキリストそのものを追求するのだという彼の熱意が感じられますが、彼は今度こそ、決して誤ることなく、自分が本当に信じられるものに対して目が開かれ、人生をかけて、命を懸けて、間違いなく、本物に対して従っていきたいという願いを強く思っていました。それを手に出来ないのならば生きている価値がないというほどに、彼はアラビヤの砂漠で、シナイ山をも望みながら、聖書を辿り、モーセのことを思いながら神様への祈りの生活を続けました。そして神様は彼のその求道にお答えになられました。

1:18 その後三年たってから、わたしはケパをたずねてエルサレムに上り、彼のもとに十五日間、滞在した。

このペテロとの会話は15日にも及びました。

マタイ 16:23 イエスは振り向いて、ペテロに言われた、「サタンよ、引きさがれ。わたしの邪魔をする者だ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている」。と言われたペテロ、あなたと共に死ぬと言ったけれども朝までに主を3度も否んで紅海の涙にくれたあのペテロです。

ペテロはかつての迫害者を、自らと同じ弱き罪人として受け入れて、神様の導きを喜び、イエス様から教えられたことをこんこんとパウロと分かち合ったに違いありません。

それがキリスト者の交わりであることと信じます。私たちはイエス様を共有する仲間なのです。それを置いて人の打算や上下関係があるのでは決してありません。

1:15 ところが、母の胎内にある時からわたしを聖別し、み恵みをもってわたしをお召しになったかたが、

1:16 異邦人の間に宣べ伝えさせるために、御子をわたしの内に啓示して下さった

人はやはり過ちを犯す罪人であるが、主はそれを全て見越してそういう真実の正反対を行くものを恵みによって赦し、癒し、教えて真実に生きるものと作り替えてくださるのです。そうして大きな働きを、神様が手ずから導いてくださるのです。

1:19 しかし、主の兄弟ヤコブ以外には、ほかのどの使徒にも会わなかった。

1:20 ここに書いていることは、神のみまえで言うが、決して偽りではない。

1:21 その後、わたしはシリヤとキリキヤとの地方に行った。

1:22 しかし、キリストにあるユダヤの諸教会には、顔を知られていなかった。

1:23 ただ彼らは、「かつて自分たちを迫害した者が、以前には撲滅しようとしていたその信仰を、今は宣べ伝えている」と聞き、

1:24 わたしのことで、神をほめたたえた。

かつての恨みとか、仇とかではなくて、彼らもまた神様を信じる者として、神様の大きな偉大なお働きと知って神様をあがめる。そういう神様を中心とした群れには大きな調和があります。人の群れであっても神様の群れである導きの中にある、神様が手ずから導かれる民、それが教会なのです。

◇祈禱；天の父なる神様、今日の礼拝を感謝します。私たちに神様ご自身が、誤りない、本当に信頼してすぐることの出来る福音、良い知らせ

であるイエス様をお与えくださいます、本当にありがとうございます。  
人にも、目に見える状況にも左右されず、神様は手ずから私たちを  
今週もお守りくださいますことを感謝いたします。あらゆる苦しめる  
方々を神様の救いと平安の中にお導き下さい。私たちの家族と、地域の  
方々を祝福して下さい。私たちをお用い下さい。主イエス様の御名によ  
って祈ります。アーメン